

鳴つき

寺田寅彦

青空文庫

別役べつちやくの姉上あがが来て西の上り端はなで話していたら要太郎が台所の方から自分を呼んで裏
 へ鳴しぎを取りに行かぬかと云う。自分はまだ一度も行った事がないが病後の事であるからと
 思うて座敷で書見しよけんをしている父上に行つてもよう御座いましよかと聞くと行くはよいが
 傘をさして行けとの事であつたから、帽をかぶつてわるい方の蝙蝠傘こうもりがさを持って裏門へま
 で行くと、要太郎はもう網をこしらえて待つていた。「別役の精せい様がこないだから連れて
 行てくれい云いよりましたがのうし。」「そうかそれでは呼んで来い」とて下女をやつた。
 間もなく来たから連れ立つて裏門を出た。バツタが驚いて足下から飛び出した。「いくら
 汚れてもよいように衣物きものを着換えて来たね。」精は無言でニコニコしている。足には尻の
 切れた草履ぞうりをはいている。小川を渡つて三軒家さんげんやの方へ出る。あちこちに稲を刈つている。
 畔あぜに刈穂を積み上げて扱こいている女の赤い帯もあちらこちらに見える。蜻蜒とんぼが足元からつ
 いと立つて向うの小石の上へとまつて目玉をぐるぐるとまわしてまた先の小石へ飛ぶ。小
 溝に泥鱒どじょうが沈んで水が濁つた。新屋敷の裏手へ廻る。自分と精とは一町ばかり後をつい
 て行く。北の山へ雲の峰が出て新築の学校の屋根がきらきらしているが風は涼しい。要太
 郎が手を上げたから余等は立止つて道にしゃがんだ。久万川くまがわの土手に沿うた一丸の二番稲

があつてその中に鳴が居ると見える。網を斜めに下向けてしきりにねらっている。自分等も息を殺して見ているとたちまち頭の上でばさ／＼と音がする。蜻蛉とんぼが傘にとまっていたのが外ほかのとんぼと喰い合つて小溝へ落ちそうにしてぷいと別れた。溝からの太陽の反射で顔がほてるような。要太郎はやはりねらいながら田を廻っている。どうも鳴は居ぬらしい。後の方でダーダーと云う者があるからふりかえると、五、六間けん後の畔あぜ道みちの分れた処の石橋の上に馬が立っている。その後についているのは十五、六の色の黒い白手拭かぶを冠かぶった女の子であつた。馬はどっちへ行こうかと云う風で立止っていると、女の子は馬の腹をくぐつて前へまわつてまたダーダーと云いながら新屋敷の方へ引いて行つた。鳴はやつぱり見えぬらしい。要太郎も少しだけ気味で網を高く上げて振るとバタ／＼と一羽飛び出して堤を越して見えなくなつた。要太郎の指をさす通りにグサ／＼と下駄の踏み込む畔を伝つて土手へ上ると、精の足元からまた一羽飛び出して高く舞い上がった。二、三度大廻りをして東の方へ下りた。「何処どこへ下りましたぞのうし。」アソコに木が二本あるネー。あの西の方に桑があるだろう。あの下あたりのようだ。「要太郎は黙つて堤を下りて行つた。堤には一面すすき野萩のほぎ茨ばらがしげつて衣物にひつかかる。どう勘違いしたのか要太郎はとんでもない方へ進んでいる。声を掛けようかと思つたが鳥を驚かしてはならぬと思つて控え

ていると果然嶋しぎは立つた。要太郎は舌打ちをしたと云う風であったが此方こつちを見て高く笑うた。そして二本並んだ木蔭へ足を投げ出して坐つて吾等を招いた。「ドーダネ。マー一服やつて縁起を直しては。巻煙草をやるか。」「ヤーありがとございます——。昨日は私の小さい網で六羽取りましたがのうし。」今に手並を見せると云う風で。

野菊が独り乱れている。「精ドーダ面白いか。」「あつい」と云いつつ藁帽をぬいで筒袖で額を撫なでた。「サーそろそろ行きましよう。モット下へ行つて見ましょ。」小津神社おづの裏から藪ふちを通つて下へ下へと行く。ところどころ粃もみがら殻がらを箕みでおおっている。鶏は喜んであつちこちこぼれた米をひろっている。子供が小流で何か釣っている。「鮒ふなか。」

「ウン。」精の友達らしい。いつの間にか要太郎が見えなくなつたと思つていと遙か向うの稲村いなむらの影から招いている。汗をふきふきついて行つた。道の上で稲を扱こいている。

「御免なさいよ。」「アイ御邪魔でございます。」實際邪魔であるので。要太郎を見ると向うの刈田の中をいかにも奇妙な腰付で網の中程を握つて走っている。すると精が「居る居る——要太郎があんなに走り出したらきつと嶋しぎが居る」と云う。なるほど要太郎は一心に田の中の一点を凝視みつめてその点のまわりを小股に走りながらまわっている。網の竿をのばしたと思つと急に足を早めて網を投げた。黒いものが立つと思つと網にかかった。バタ

くくしている。要太郎も走る。精も走る。綺麗な鳴だ。ドレドレと精は急いで受取って足を握って羽をバタ／＼さす。「綺麗な鳥よ、綺麗ジャノー。」「遁^{にが}しちや厭^{いや}でございますよ。」「ニガスモンカ。」早く殺さないと肉が落ちると云うので要太郎が鳥の脇腹をつまむと首がぐたりとなつた。脆^{もろ}いもので。これが手始めでそれからは取るは取るは、少しの間^{こむなぐろ}に五羽、外に小胸黒を一羽取つた。近頃このくらい面白かつた事はない。「今晚鳴の御化けが来るぜ。」「来たら脇腹をつまんでやらあ。」

(明治三十四年九月)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴つき

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>